

OCUAC

大阪市立大学山岳会会報 No. 50 2010.6.22

目次

	兵頭	渉	頁
表紙裏・写真（ランタン・リルンと BC 墓碑）			
「ランタン・リルン追悼 50年」			
・はじめに	伴	明	1
・報告			
A 隊活動報告	北濃	祥二	2～3
B 隊活動報告	伴	明	4～5
C 隊活動報告	兵頭	渉	6～10
ヤラピーク登頂記	島川	勝	11
・ランタン・リルン墓参団に参加して	池永	薫爾	12～13
・遺族より			
墓参団に参加して	森本	広志	14
残念記	大嶋	信吾	15
・「法語」（ランタン村墓碑前にて）	澤田	宗博	16
・ネパール紀行 わが青春の鎮魂歌	浅部	禎一	17～19
中ノ湯泊山スキー	田中	博之	20
ダイヤモンドトレールをのんびり歩く			
上田 忠士、苑樹 慶子、鷺田 ゆり子			21
総会が開催されました！			22～27
・会長就任挨拶 ・幹事長就任挨拶 ・活動報告/予定			
・総会案内の通信欄より			
追悼			
池田正男先輩に送る	池永	薫爾	28
裏表紙裏・写真			
（ランタンⅡ峰西面、チベットの村遠望）	山田	裕敏	



「ランタン・リルン追悼 50 年」

～墓参/トレッキング/登山～

はじめに

—幹事を代表して—

伴 明

形は「第1次隊遭難者3名の50回忌追悼法要をランタン村墓碑の前で行うこと」であったが、私の心の中では市大山岳会のこれまでの50年というヒマラヤ初登攀時代の活動の終止符を打つイベントでもあった。

この50年は1961年春のランタン・リルン第1次隊によって幕が開き、1964年の第2次隊、1970年のカンジロバ隊、1978年の第3次隊、1989年の四光峰隊と5回のヒマラヤ登山を行い、その結果 市大山岳会としてはランタン・リルン、モリモト・ピーク、ウルキンマン、カンジロバヒマール主峰、四光峰の初登頂という登山史に残る成果をあげることができた。

これらの成果をあげることができた反面、この時代を通じて山岳会にとってもっとも衝撃的な「できごと」は第1次隊の遭難であった。山岳会はもとより隊員、隊員家族のその後の人生に与えた影響の大きさははかり知ることができない。

遭難で始まった市大山岳会の50年をその追悼式で締めくくることが、特にランタン・リルン登山をもっとも強力に支援して頂いた池永名誉顧問に墓碑の前で鎮魂の祈りを捧げていただくこと、森本嘉一隊長遺児の森本広志さん、大嶋健司隊員次弟の大嶋信吾さんにはリルン氷河第3キャンプの現場を目の当たりにしていただくこと、大嶋信吾さんは出発直前心臓の持病がよくなり不参加となったが、池永さん森本さんにはかかる目的を果たしていただいて、*総勢28名の墓参団の行程が無事終了し、帰国することができた。

*[参加者一覧] (順不同。敬称略)

A 隊：池永、馬野、廣谷、橋本夫妻、門田、北濃 (リーダー)

B 隊：川勝、浅部、東、近藤、山辻、伴 (リーダー)

岡本、藤村、山田、森本

C 隊：佐々木 (リーダー)、上田、島川、兵頭、澤田、福山、和田

宗實、鷺田、苑樹、佐々木夫人

A隊活動報告

北濃 祥二

5月8日(土)	関空、成田からほぼ定刻にバンコク到着。出迎えのクルマで、グランド インカム ホテルへ(約10分)。空港から近いことがなにより。 A隊は、シニア隊で、33年卒の私が一番若いメンバー。また、森本隊長、大嶋健司隊員と一番接触していたメンバーです。それだけに、ランタン村での50回忌が無事営まれることを、ただ只管願っている人たちです。 夕食では、成功を祈って献杯。
5月9日(日)	朝食後空港へ、TG64便にてカトマンズへ。 機内でビザ申請書作成。着後ビザなしカウンターに並ぶ。バンダ(スト)が終わっていて、ホッとする。出迎えのバスでKTM ゲストハウスへ。部屋は、2部屋を除き1F。池永さんもインドから元気に到着。全員揃う。
5月10日(月)	午前は、上田さんの友人のMs アミタさんの案内で世界遺産でもあり、ヒンズー教の聖地、パシュパティナート寺院、と火葬場、そして、町の中心地、ダルバール広場の旧王宮など。午後は、隣町のパタンの旧王宮など世界遺産の観光。暑さに負けず、元気に行動。
5月11日(火)	快晴。24人乗りの大型ヘリは、力強いエンジン音を響かせながら、ランタン村まで快適な飛行。出迎えの先発隊と合流後、森本隊長、大嶋隊員、ギャルツェン・ノルブの遭難50回忌法要。前日から準備万端を整えてくれた皆さんに感謝。 墓碑まで行く間に酸素不足で息切れしないかと心配でしたが、全員酸素ボンベに頼ることなく、法要に望めました。 澤田導師のご引導のもと、般若心経をととなえ、お焼香をして、50年前に想いを馳せました。碑前での池永名誉顧問のご挨拶には、誰もが感極まりました。まさに「歳月如流五十年・・・追懷往日催幽涙・・・」でした。 しずかなランタン村に、桜花爛漫が響き渡り、森本隊長、大嶋隊員、そして、ギャルツェンにも喜んでいただけたことと思います。 終了後、待たせていたヘリに乗り込んだ時に、初めて心が休まりました。 カトマンズへ帰り、ここからは、A、B隊合同で昼食。 たらふく食べ、お腹が空かないうちに、夕食のサヨナラ・パーティ。エベレスト登頂者のサインボードを所狭しと飾ってあるラム・ドードルで、また献杯、乾杯へ。さらに話しがはずみましたが、さすがの大食漢のみなさんも全メニューは食べられず、残念。 A隊の皆さんは、さすが人生のベテランであり、体調維持には、個々に細心の注意を払われ、誰ひとり体調をくずすことなく、それぞれマイペースで過ごしておられました。

5月12日（水）	希望者は、早朝からマウンテンフライトへ。ランタン・リルンも、エベレストもくっきりと見えたことでしょう。 午後は、アミタさんの案内で、住民が生活する街全体が世界遺産になっているバクタブルの観光。15－18世紀に栄えたマッラ王朝の古都。 入場料は一人\$10だが、運転手が駐車場を間違え、地元民が通る道から入場。帰途も観光客用のゲートを通らずに出たため、節約できました。 夕食は、ゲストハウスの近くで、ネパールの唄と踊りのショーを見ながらネワールの伝統料理を楽しみ、最後の夜を楽しみました。
5月13日（木）	朝食後、ひとときは、土産を買いにタメルの町へ。TGの乗り継ぎでバンコク経由、夜行便で帰国。

私は、A隊のリーダーですが、最年少でもあり、いわば新入部員で、A隊の皆さんには、大変ご協力を頂きました。感謝申し上げます。

2004年の春に、廣谷さん、橋本さんご夫妻、川勝さん、健司さんの姉上さまが、墓参にお出でになられた時には、私は、JICAのシニア海外ボランティアとして、ネパール観光局で、2年間、活動していました。

当時は、まだ王政で、マオイストとの内戦の最中でした。ランタン谷の入り口には、マオイストが大勢住んでいて、休暇が認められず、ヘリでフライオーバーすると言っても、JICAの規制は厳重で、残念な思いをしました。

今回、王様が退き、マオイストが政治の主流を占める時代ですが、バンダ（強制ゼネスト）が頻繁にあり、当時より、貧富の差が大きいような気がしました。

ここで、先輩がたの印象をひとつ・・・。

池永さん：80歳の最年長者。インドから高級バナナを持参。朝食として整腸。

毎日8,000歩を目指してゲストハウス内でも庭を散歩。そのご努力に頭が下がります。

馬野さん：初めてのネパールであるが、体力抜群、食欲旺盛。商業登山なら、エベレストも踏破できるのでは？廣谷さんらとの囲碁を楽しんでおられました。

廣谷さん：ランタン村の墓碑の前では、1次隊員として、一番追悼の想いに駆られたことでしょう。囲碁愛好者のリーグ戦は、楽しめたと思います。

橋本さんご夫妻：まさに夫唱婦隨の良きカップル。健司さんの親友でもあり、

いろんな思い出が胸をうったことでしょう。食事の相談にのって頂き、感謝。

門田さん：2次隊のドクターだけに、バルスメーター？で、全員の心肺機能を測ってくださり、感謝。お孫さんへのお土産は、喜ばれたことでしょう。

山辻さん：B隊ながら、行動は殆どA隊と同様。整腸剤、有難うございました。

B隊活動報告

伴 明

5月6日：3名成田より、6名関空よりタイ航空で出発、バンコクで合流し、空港近くのグランドインカムホテルに宿泊。藤村はバンコクのホテルで合流。夜市内へ出かけ、SOMBOONで夕食をとった。

5月7日：タイ航空でカトマンズ入り、空港でビザを取得して外へ出たら何やらものものしい雰囲気。5月1日からバンダ（ゼネスト）続行中、エージェントの出迎えバスでタメルのカトマンズゲストハウスに入る。夕食はホテルでとる。商店街は閉まっているし、バスタクシーも走っていないが、夜6時からEXCHANGERはオープンしており、円をネパールルピーに換える。

5月8日曇りのち晴れ：6時半ホテル出発、エージェントのバスで空港へ。

9時ごろSHREE-AIRLINESの22人乗りロシア製MIL-8大型ヘリコプターがヤッコラサとばかり重たげにランタン谷向けて飛び立つ。パイロットはロシア人でほかに乗員2名。電気系統の配線がむきだしのままなのを見て森本さんが「これでもしっかりセットしてあり、さすがロシア製ですね」とへんな感心の仕方をする。

雲がかなり低くあまり見通しが良くないと思っていたら、北向きの飛行を急にぐると南に旋回して途中のダウンチェに降りた。ランタン谷に雲が発生していて今そこへの飛行は不能だと。2時間待って再び飛び立ち、昼すぎにランタン村を通り越して、リルン正面を仰ぐことができるキャンジン（3,800m）に無事着陸した。

C隊がすでにキャンジンに到着していて我々を迎えてくれた。第3次隊以来32年ぶりに見たランタン・リルンとリルン氷河の威容は、瞬時に49年前のあの遭難を眼前に思い起こさせ、涙が止まらなかった。

5月9日晴れ：ヘリで富士山頂上なみの高さのキャンジンに着いたばかりで、急な登降は必ず高度障害を引き起こすので、本日はもっとリルン氷河がよく見えるあたりへ散歩ときめていた。C隊がテントを持参し、リルン氷河ベースキャンプ（4,200m）で1泊のスケジュールで出発したあと、8時過ぎ我々もバッチィをあとにした。ところが驚いたことに川勝さんはじめ高齢の面々がC隊に追いつき、森本さんはC隊の兵頭、和田と話しながらモレーンの上をベースキャンプ地に向けて登っていった。

さすが最後は少し目がかすみましてと言っていたが。東先生と伴が遅れてベースキャンプ地に着いたときは、すでにC隊と追いついたB隊の面々で、修復されてしっかり固定された石板の墓碑の前で澤田僧侶の読経をもって追悼式をすませている。

この「奥の院」ともいふべき墓碑のある場所は、キャンジンから約3-4時間、アヤメや桜草の咲くサイドモレーンの内側のヤク道を登り切った見晴らしのよいところにある。リルン懸垂氷河の小豆岩やピナクル尾根、その上の第3キャンプ地点、さらにアイスビルディングが積み重なって頂上へと続く雪氷の東稜、東壁をへだててスカイラインをなす東南稜、右にはキムシュンの3本槍、南面はナヤカンガとホンゲンドプケが白く輝いている、天下にこれほどすばらしい墓所があるのか。

夕刻5時半、明るいうちにぐたぐたと疲れてキャンジンのバツティに戻った。

5月10日晴れ： B隊は明るくてのんびりしたゆるやかな登山道をランタン村（3、500m）へ3時間かけて下る。C隊はリルンベースキャンプからランタン村まで下った。B、C隊ともにランタン村のバツティに同宿。

5月11日快晴：いよいよ本番の日がやってきた。まことに幸運にも空はヒマラヤン・ブルーに澄み切っている。8時40分B、C隊が見守るなか、A隊の乗ったMIL-8機が村から少し上がった急ごしらえのヘリポートに見事に着陸、おもわず拍手喝采する。池永さん、馬野さん、廣谷さん、橋本さん夫妻、門田さん、北濃さん、山辻さん、よくぞ来ていただきました。用意した酸素ボンベはいっさい使用することなく、A、B、C隊28名全員元気に、ランタン・リルン南面麓ランタン村背後大岩壁下の銅板墓碑前に集まった。

池永名誉顧問の挨拶、澤田僧侶の般若心経、舍利禮文、供養文を唱える声がランタン谷のしじまに染み透っていくなか、全員がおもいおもいに鎮魂の祈りを捧げ焼香をした。1時間半待ってもらったヘリコプターにA、B隊とC隊の3名計18名が乗り、透明に晴れ渡ったランタン谷をカトマンズ目指して飛び立っていくのを見送った。

この後、山田と伴はC隊（登山）に参加し、18名は12日、13日に分かれてカトマンズを後にし、13日、14日 日本に帰国した。

C隊活動報告

兵頭 渉

4月27日 成田/関空>バンコク

成田からは一人旅、バンコクで関空からのメンバーと合流。34kgのバゲージはオーバーウエイトチャージも掛からず成田からカトマンズまでダイレクト、関空からはそれが叶わず一旦持ち出してホテルへ。市内はデモで近寄れず、ホテルのレストランで夕食。

4月28日 バンコク>カトマンズ

空港にはエージェント、シェルパが出迎え、用意されたマイクロバスでカトマンズ・ゲストハウスへ。長いアプローチと綺麗で静かな中庭、タメル地区では一番のゲストハウス。B氏、S氏が昨年事前調査し、1人一泊35US\$で予約したとのこと。夕食までの間、W氏とコスモトレックに大西さんを訪問、近くの和風レストラン「はな」でランタン、西ネパール、活動状況などを伺った。

夕食はエージェントが段取りした民族舞踊ショーレストランで。

4月29日 カトマンズ

S氏は登山局へパーミッションを受け取りに、K氏とWさんはネパールの知人のところへ、残るメンバーはマイクロバスでバクタプルへ観光旅行。

夕食はトレッキングに向けステーキハウスで栄養を。

4月30日 カトマンズ>シャブルベンシ

10名のメンバーに加えシェルパ、コック、ポーターを乗せたチャーターバスで早朝カトマンズを出発。トリスリバザール迄は舗装された山道、2カ所のチェックポストを過ぎてドンチェ。山越えをしてランタン谷に向かうW氏とシェルパ下車。

工事中の悪路に車は上下左右に不規則運動、窓や天井に頭をぶついたり、お腹の中が揺すぶられ体調を悪くした人も出る始末。所要、約8時間。

5月1日 シャブルベンシ>ラマホテル

トレッキング初日。乾期で水量の減ったボータ・コシの吊り橋を渡りランタン・コーラ沿いの山道をラマホテルへ、大木に咲く合歓の花、シャクナゲの赤い花に迎えられて快適な一日。

5月2日 ラマホテル>ランタン

ランタンでヘリポート候補地を探す、墓碑に近く平坦で25m×25m以上の広さで…。過去に大型ヘリが発着したことがある場所を候補地とした(後日ヘリパイロットから拒否されて別の場所となった)。

5月3日 ランタン>キャンジュン

青空が広がる谷をキャンジュンへ。ランタンリルンの頂は雲に覆われて望めず。高度順化を兼ねてリルン氷河サイドモレーンの末端の丘までハイキング。3,800mを超

えると高度の為すぐに息が上がる。

ダイアモックスの服用の有無に関わらず高度障害の症状を訴える人は出ていない。

午後、W氏とシェルパがキャンジュン到着、驚異的なスピードに皆驚く、しかもドンチェで吞んだロキシーが原因と思える下痢で2日間食事抜き！！

5月4日 キャンジュン

キャンジュン裏山ハイキング。ランタン・リルンの展望が素晴らしい！！

5月5日 キャンジュン>ニャンガンカルカ

ナヤカングカルカ迄、シャクナゲ・野の花観賞ハイキングメンバーと一緒に行く。休憩時間は冬虫夏草探しに夢中。皆と別れてニャンガンカルカへ。テントを張り終えた頃から雨が降り出した。雨は夜明けまで断続的に続いたようだ。

5月6日 ニャンガンカルカ>ハイキャンプ

雨は止んだが濃い霧の中ハイキャンプへ。昨夜、4,500m付近から上は雪が降ったようで付近は雪景色。ハイキャンプは2007年秋に引き返した場所より更にガンジャラ方向へ30分ほど登った、サイドモレーンと山の斜面の間に出来た河原、横に小さな流れがある。標高約4,800m、今日の獲得高度は600m、所要3時間。

二人のシェルパはルート工作に向かう。テントから出てガスの切れ間からルートを窺うがシェルパの行動は見えない。夕刻、シェルパが帰ってきた。下部岸壁に2ピッチのフィックスロープ設置。いよいよ明日はナヤカング、好天を期して早めに就寝。

5月7日 ナヤカング登頂

2時半起床、ガスの為視界不良、昨夜は軽く降雪が有った模様。3時出発。ガスがヘッドランプに照らし出されホワイトアウト、シェルパの足下を頼りにサイドモレーンを登る。直線距離で1kmにも満たないカール状のモレーン、大きくアップダウンを繰り返し約3時間かけて横断、下部岸壁に到着。ガスが薄くなってきたようだ。このまま晴れて欲しい。取り付けから少し登った所でハーネスを着け、ユマールをフィックスロープにセットし2ピッチ。岩が濡れてて滑りやすいがグレードはⅡ級+。終了点から上部は雪を被ったガラガラのリッジ、上部はガスで何も見えない。アイゼンを履いてノーザイルでガスに隠れた北東稜線を目指す。青空が時々顔を見せる。山頂からの展望に期待してひたすら登る。傾斜のきつい雪面を50m程登ると稜線、標高約5,400m、11時到着。正面に青氷のアイスビルディング、崩壊したら直撃されそう！シェルパが交代で延ばしてゆくフィックスにユマールをセットし青氷に積もった雪に靴を潜らせながら雪面をユックリ登る。再びガス濃くなって来るのが気がかりだがスピードは上がらない。一時間程登ると傾斜は緩くなる、頂上稜線だ。シェルパがサミット！と叫ぶ。一層濃さを増したガスに景色は閉じこめられ、記念写真もそこそこ下山開始、13時。下りは忠実に登路をトレース。雪面は快適に飛ばし、岸壁の下りはフィックスロープを掴んで慎重に。カール状のモレーンを横断する時分には体の動きが悪くなり、ノロノロとテントサイトに戻った。夜、雪が降った。

5月8日 ハイキャンプ>キャンジュン

ランタン谷の雲の切れ間から青空が覗く、今日はB隊の入山日、ヘリコプターは飛べるか？積雪 30cm 程の雪道をキャンジュンへ下る。4,500m付近から雪も消え、日差しが戻ってくる。シェルパがホットジュースを持って迎えに来てくれた。11時半キャンジュン着。B隊はドンチェで天候待ちとのこと。12時過ぎヘリのエンジン音！B隊到着。

5月9日 キャンジュン>リルンBC

快晴の朝日の中、リルンBC墓碑での50回忌法要へ向けて出発。

11時半、澤田氏の法話、読経に続き参列者が順次焼香。

トレック隊は此所でテント泊、B隊のメンバーはキャンジュンへ。

5月10日 リルンBC>ランタン村

リルンBCからランタン村へ。バッチィで先着したB隊が迎えてくれた。

墓碑清掃、付近整備、ヘリポートからの道順確認、サポート方法の確認など明日の法要、A隊を迎える準備を慌ただしく終え、久しぶりの鶏肉を使ったチキンカレー、みそ汁の夕食に舌鼓。

5月11日 ランタン村

朝食後、小学校校長に準備した文房具、サッカーボールなどを寄付。

ランタンコーラ下流からエンジン音、8時30分、A隊到着。

ランタン村墓碑前で9時10分より澤田氏の法話、読経に続き参列者が順次焼香。

10時10分、A隊、B隊及びトレック隊の帰国メンバーを乗せたヘリはフワリと浮かび上がり、間髪入れず頭から谷底に飛び込むようにしてカトマンズへ向かった。

K氏、Wさん、S氏はラマホテルへ下山開始。登山隊はキャンジュンへ登り。

5月12日 キャンジュン

登山隊はキャンジュンで休養。W氏のティルマン・コル隊は5日間の予定でランタン谷の奥へ出発。

5月13日 キャンジュン>ランシサカルカ

ランタン・リルンを振り返り、ポンゲンドプク、ガンチェンボ、ランシサリを眺めつつランシサカルカへ。テントサイトから端正な四角錐に雲を纏ったウルキンマンが見える。ランタン谷の上流には雪と氷の鎧に包まれたペンタンカルポリが輝いている。

5月14日 ランシサカルカ>モリモト・カルカBC (4,650m)

朝日に照らされるウルキンマン東面、ポンゲンドプクを西方遠くに眺め、モリモト仮BCへ。渇水期で流水がなく、小川に染み出して溜まった水で炊飯。

5月15日 モリモト・カルカBC

昨夜の降雪で15cmの積雪。休養とBC偵察のため沈殿。

5月16日 モリモト・カルカBC>モリモトBC (5,000m)

モリモト氷河のモレーンの急な斜面を登り、小さな流れを横切りモリモトBCへ。高度を上げるにつれ、モリモトピークが両翼を広げ、その右奥に鋭い頂のキュンカリが見え始める。深い青空を背景にモリモトピーク、150m高の岩壁の上にプラトー氷河の断面が見える。小川の畔のテントサイト、カルカBCから3時間半、獲得高度350m。

午後3時過ぎ、ティルマン隊が合流。仮カルカBCに残したメモに気付いてくれたようだ。

5月17日 モリモトBC>ABC (5,400m)

ルート工作の為先行したシェルパを追って出発。左側のガラ場と氷河岩壁の間を縫うように辿ってプラトーへ。シシャパンマの頂上稜線が尾根越しに見え始める。

プラトーは半径500mの平坦な雪原、クレバスは見あたらず。シェルパ達が予定ルートの取付付近で活動している。ルート工作を追っかけて今日中にも稜線・付近の小岩峰に登ってみようとW氏と二人、早めに出発したが断念。

ルート工作は遅々として進まず、シェルパに初登時のルートは放棄し撤収を指示。ルートは46年前とは様相を大きく変え、落石、不安定な浮き石と岩肌を濡らす雪解け水で極めてデンジャラスとの事。NMAの公式記録には第2登はなされていないようだが、残置ロープを発見、このルートをトライした隊が居たことが判明。

新ルートは稜線に突き上げるスノーリッジ、行動時間は10時間、出発は明朝3時、と決定。

5月18日 モリモトピーク アタック>ペンダンカルボ

2時、シェルパがルート工作の為出発する声を聞きながら朝食を待つ。3時30分出発。小さなデブリを登り、ユマールをフィックスにセットし登攀開始。3ピッチほどで停滞。ルートファインディングとフィックスロープ工作に手間取っているようだ。4時50分夜が明けてきた。上空は雲はないが東の空は赤く朝焼け、いやな色だ。2ピッチ進む、5時50分。昨日決定した下降開始予定時刻9時迄に稜線に出ることは絶望的。予定の倍以上時間が掛かるスローペース、天気は悪化の兆候を示している、フィックスロープ不足と安全確保リスク増大。登頂断念し、6時下降開始。慌ただしく荷物をまとめABC撤収、モリモトBC、モリモト仮BC、ペンダンカルボ迄一気に下る。

5月19日 ペンダンカルボ>キャンジュン

キャンジュンのバッティで吉田と名乗る方が来られ、日本人女性がガンジャラ越えてカトマンズへ向かおうとしているが同じ行程であれば同行願えないかとのこと。何うと、吉田勝さんは、北海道大学山岳部、1970-2001 大阪市立大学理学部に在籍、探検部の顧問をされていた、などネパール山中での奇遇に遅くまで話が弾んだ。

5月20日 キャンジュン>ラマホテル

5月21日 ラマホテル>シャブルベンシ

5月22日 シャブルベンシ>カトマンズ

ランタン北面探査に向かうY氏隊と別れ、チャーターしたランドクルーザーにてカト

ヤラピーク登頂記

Yala Peak (5500m)

島 川 勝

5月7日

前日、キャンジュンゴンバからヤラカルカ先のBCテント地に約7時間かけて着く。今日は登頂日ということで、午前2時起床、3時出発の予定であったが、霧が濃いためカップラーメンを食べた後、出発を遅らせる。

4時40分テント地を出発する。メンバーは、テンパ、佐々木、宗實、島川、福山、澤田である。小高くなっているモレーンを進むと霧も晴れてきた。

リルンの姿が新雪で、真っ白になり、素晴らしく美しい。いそいでシャッターをきる。

7時30分、モレーンが切れて雪原となるところで、佐々木、宗實、澤田は下山することになった。3時間かけてやっとモレーンの境界まできた事になる。2年半前での兵頭さんの記録では、テントから3時間半で頂上についているが、雪が少なくてテントからズーとガラ場である。以前は、テントからズーとアイゼンであったとの事。

テンパ、島川、福山はここでアイゼンを着け、アンザイレンで雪原をひたすら登る。

雪質は柔らかく、下がガレなので崩れて歩きにくい。高度も5000mを超えるので、呼吸がやや苦しくなる。トップのテンパは、全く休まずにどんどんと高度を上げてゆく。最後の30m程の急登を終えると、ヤラピーク頂上だった。

9時40分、ヤラピーク頂上に着く。

アイゼンを着けてから2時間ほどで頂上についた。頂上は狭く、霧のため展望もなかった。記念撮影をして10時に下山を開始する。雪が柔らかいので、慎重に下山する。

10時40分アイゼンを外す。

12時テント地に着き、午後1時ころキャンジュンまで来た道を引き返す。キャンジュン着は午後4時ころ。長い長い約12時間行動の結末であった。

雪の状況により、倍以上の時間がかかった事になる。

それにしても新雪輝くりルンは、神々しかった。



ランタン・リルン墓参団に参加して

池永薫爾

第2次世界大戦終了後、大阪市立大学山岳部は復活を果たし、やがてヒマラヤを目指した。選ばれた山は、7246米ランタン・リルンであった。隊長には、戦前山岳部で活躍された森本嘉一さんが選ばれた。と云うことより、この人しか適任者はおられなかった。

1961年3月、森本隊長以下5名の隊員諸君がラオス丸にて神戸を出航した。大嶋健司君は関谷産業インド駐在のため現地参加した。初めての海外遠征であり、インド到着後カトマンズ迄の陸送・登山許可申請、シェルパの手配など御苦労は多かったと察せられる。

キャラバン後ランタンに到着、高度順応を終え、愈々登山が開始された。ルートは氷河ルートを選び第3キャンプを設置、そこで雪崩に襲われ森本隊長、大嶋隊員、サーダー ガルチェン・ノルブが帰らぬ人となってしまった。

時に1961年5月11日、本年はその50回忌に当たる。

伴君、佐々木君の発案により、ランタン・リルン墓参をすることになった。A隊はカトマンズよりのヘリコプター、B隊はトレッキング、そしてC隊はトレッキング後モリモトピーク（6750米）登山、と30名のメンバーで墓参計画が進められた。

私はヘリコプターで7名の諸君と共にランタン村に到着。村人達の協力を得て墓碑へ向かった。澤田さんの読経により慰霊が行われた。万感胸に迫る思いで27名の多くの諸君と共に参拝した。

50年の歳月が過ぎたが、その間、山岳会は1964年第2次隊を派遣。そして1978年第3次隊（伴隊長）により10月24日和田隊員が念願の登頂に成功した。

その後、市大山岳会はカンジロバヒマール、チベット四光峰に登頂、国内外で活躍している。

今回、森本さんのご長男 広志さんも参加して頂いていたが森本家の50年は厳しく、何と申し上げてよいか言葉に窮している。

森本さん、大嶋さん、50年が経ちました。

あなた方のことを忘れず、それが心の支えとなり、大阪市大山岳会は活躍を続けています。有難うございました。



五十四忌法要/ランタン村/2010年5月11日・大阪市立大学山岳会

墓参団に参加して

森本 広志

昨年の今頃でしたか、伴さんから「リルン一次隊の 50 回忌墓参団を計画している。池永御大を始め、30 名程度の方が参集される予定なので、是非いらっしゃい」とご下命を頂きました。長年の間、皆様には何度もお墓参りをさせて頂いて、有難いことと存じておりましたし、半世紀という一つの区切りとして、また関係者の方とご一緒できる機会がそうあらうとも思えませんでしたので、常習喫煙者で高地にはちょっと不安があったのですが、足手まといにならない範囲で参加させて頂くことに致しました。

乗継のバンコクはデモ騒ぎ、到着したカトマンズでもゼネストと、前半は何かと多端で、カトマンズからのヘリも出発が大幅に遅れた上、ランタン谷に入る手前で雲に阻まれてドンチェまで引き返して待機、と、どうなることかと思いましたが、まだ雲の晴れない中再離陸して、ランタン谷に旋回したところで綺麗に雲が切れ、今にして思えばドンチェの「不時着」が厄落として、その後は順調に推移したのかも知れません。

Kyanjin 二泊、Lantang 村一泊の間は好天に恵まれ、午前中は Lirung を始め、Kimshung や Naya Kang 遠く Ganchenpo など、姿の良い山々を、また、夜は満天の星空を眺めることができましたし、心配していた高度馴化もまあまあで、9 日の Kyanjin — Lirung BC では、目が眩むというか霞むというか、で、兵頭さんにご面倒をおかけしましたが、何とか法要には間にあう程度に登れ、下りにかかっただけでどうということもなく幸いでした。カトマンズに帰着後はゼネストも解けていて、のんびりさせて頂きましたし、近藤さんとは喫煙者仲間として、廣谷さんとは成田への帰国便で、と懐かしい方々ともお話ができましたし、充実した一週間だったと存じます。お世話になった皆さまには改めて御礼申し上げます。

今回使用したヘリは旧ソ連の開発したミル 8 で、旧ソ連、というだけで不安気な方も居られましたので申し上げますでしたが、古い設計 (帰国後調べてみたところ西側が確認している初飛行は、奇しくも 61 年) ながら未だに殆ど原型のまま生産が続いている傑作機で、西側で広く運用されている唯一の旧ソ連の航空機でしょう。50 年代から 60 年代始め、は、ヒマラヤだけではなく、宇宙や極地や、広義の Expedition の時代で、勿論 Mi 8 は軍用としての開発ですが、やはりあの時代の Taste を十分遺しています。行程中、多分最年少参加者である自分から見て、皆さんのお元気なのに驚嘆しましたが、50 年は長いようで短いというか、あのクラスのヘリで Mi 8 を凌駕するものは生まれなかったんですから、皆さんも今後とも、ほどほどに現役、でますますお元気にご活躍が続けられますようお祈り致します。

残念記

大嶋 信吾

春の彼岸には丹波の寺で兄弟が集まり、健司の五十回忌法要を行いました。その時、健司の墓碑に向い、「今年は信吾がヒマラヤのお墓にも挨拶に行くから」と呼びかけておりました。ところが、そのヒマラヤ墓参を直前にキャンセルする破目になってしまい、市大山岳会の皆様に大変ご迷惑をおかけすることになってしまいました。

不整脈は数年前から持病となっており、毎月医者診断も受け、薬も毎日服用しておりました。そして今回のヒマラヤツアーについては、このドクターにも相談し、何とかゴーサインも得ておりました。宿泊はすべてカトマンズの一流ホテルだし、標高の高いところへは往復ヘリコプターが運んでくれる、緊急の場合の酸素の備えまである。そんなヒマラヤならば問題はなかろう、ということだったわけです。それに私としては、「この機会をのがせば一生もうチャンスはないだろうから」とヒマラヤへの思い入れもつづいておりました。

そして、出発一週間前、5月1日の朝、食事を終えて居間のソファーに移ろうとした時、強烈な心臓発作が起り、意識を失いました。病院はゴールデンウィークの連休に入ろうとする微妙なタイミングでしたが、幸い、いくつかのラッキーが重なり、国立循環器病センターの救急外来に収容してもらえ、入院即手術となりました。はじめの発作から2時間以内に専門の病院の手術台上に居たことになります。

ペースメーカーの埋め込みもうまくいき、術後は至極順調で、心臓は正確に力強く脈打っています。そして、5月14日、AB隊の帰国と同じ日に退院致しました。

5月1日の発作がこの日に起らず、もし日本出発後に起っていたら・・・、と思うとぞっと致します。出発せまった段階のキャンセルでご迷惑をおかけしましたが、あのタイミングで起ってくれてほんとに良かったと思います。不幸中の幸いでした。

B隊で帰国された川勝弘一様から、帰国早々にお手紙と幾枚かの写真をお送りいただきました。いずれの写真も臨場感あふれる素晴らしいものでした。ランタン・リルンの純白の雄姿や、荒々しい氷河を背景に新しい卒塔婆と折鶴が供えられ、普段よりにぎやかな墓碑、日焼けしたみなさんの顔がそろそろ集合写真、朗々とした声がつたわって来そうな澤田僧侶の読経の姿。見つめていると、そこに皆様とご一緒している気分になります。

短期間にいろんなことが起り、私のヒマラヤ墓参も終わりました。

法語

～ランタン村墓碑前にて～

曹洞宗 覚円寺

澤田 宗博

歲月如流五十年 相迎忌景淡香煙
追懷往日催幽淚 異國山溪悲曲旋
恭惟此旨迎池永薰爾團長以下三十名泉人
大阪市立大學山岳會第一次ランタン・リルン
追悼團 獻佛香華燈燭茶菓等嚴修五十四
忌供養 所集功徳回向以伸供養
嶺雪院雄譽嘉峰居士
靈秀院高岳日健居士
昨夕白雲去岫 今朝旭光映巔
即今眠此溪谷西先輩 應供端的如何指宣
嶺雪岳高閑寂境
故人蹤秀尚今傳

歲月流るるが如く五十年
忌景を相い迎へ香煙淡し
往日を追懷して幽淚を催す
異國の山溪に悲曲旋る
恭しく惟みれば此の日 池永薰爾團長以下三十
名の岳人大阪市立大學山岳會第一次ランタン・リルン
登山隊遭難者追悼團を迎へ 香華燈燭茶菓等を獻備
し 嚴かに五十四回供養を修する集むる所の功徳は
嶺雪院雄譽嘉峰居士
靈秀院高岳日健居士
零位に回向し以つて供養を伸ぶ
昨夕に白雲は岫を去り 今朝に旭光は巔に映ゆ
即今此の溪谷に眠る西先輩 應供端的如何が指宣
せん
嶺雪の岳高く閑寂の境
故人の蹤秀でて尚今に傳う

(親友 S氏宛 私信)

ネパール紀行 わが青春の鎮魂歌

2010年5月

浅部 禎一

拝啓 風薫る爽やかな季節になりましたが、お元気でお過ごしの御事と存じます。
私も此のところ、「後期高齢者」生活にすっかり慣れ、孫たちとのやり取りの内に、安らぎを見出すことが増えて参りました。

このような、平凡な日々のなかで、本年5月6日～14日まで、ネパールのランタンリルン峰(7246m)の麓の村で行われた、大阪市立大学山岳会ランタンリルン登山隊遭難者50回忌トレッキングに参加したことは、意義深いことでした。
正直なところ、1～2年前からごく軽度ながら、脚の関節(膝)痛があり、医師からは「積年の酷使のツケゆえ修理は難しい。せいぜい大事に使うこと。」とのご宣託を受けているため、少々ためらう気持ちもありましたが、「いまの機」を逃せば再機なし・・・と、女房殿からも励まされ、「墓参団」に加えて頂きました。

総勢28名になりましたが、各位の体力・都合にあわせ、3グループに別れました。

A隊は、比較的高齢者中心でカトマンズに滞在され、合同慰霊祭の5月11日、カトマンズ空港からヘリ(約50分)でランタン村へ入り、祭祀の後待機しているヘリで、すぐKTMへ戻ることで、高山病を予防するチーム。他方「若手」のC隊は、早くから現地へ入り、本格的トレッキングと登山をする・・・など、行き届いた計画に基づく行動は、流石に「山岳部OB・OGらしい」ものでした。

私は、B隊で5月8日 KTM空港からヘリで山麓に入り、ちょっとしたホテルのような山小屋に3泊して、高地生活を楽しみました。なにしろ、山麓といっても、3600～3800m・・・ランタン谷最奥の村ですから、ヘリから降りると少しフラツキます。屏風のように、眼前に聳え立つ岩峰と、氷河に囲まれた広大な盆地状の谷は、それ自体いくつもの丘陵と、荒涼とした岩の河原が織りなす、広く明るいカールです。

村人は、ヤクという高所種の牛を、此の草原に放牧しています。草原には、背丈10cm位のアヤメの花(名前が判りませんので、取りあえず「リルン姫アイリス」と勝手に命名しましたが、正式な花名はあるはずです。)が、至るところに咲き乱れ、桜草の群落とともに目を楽しませてくれました。

旅の始めは5月7日・・・騒乱の続くバンコクを経て、カトマンズへ入りました。この街も、毛派のゼネスト呼びかけで、あちこち群がる人とゴミだらけ・・・身の安全に不安を感じることはないものの、バスもタクシーもストップ。ホテルの観光客向けバスは、なんとか走行を認められる・・・という状況のなかに飛び込みました。

ここでも、もと商社員のメンバーの活躍で、大変助かりました。今にして、自分一人こんな状況に放り出されていたら・・・と思うと、ゾッとします。

ところで、市大山岳会は、戦前のお阪商大時代から、大学山岳部として、活発な活動をしてきましたが、先の大戦で13名の戦没者を出し、戦後の学制改革の荒波の内、僅かに残った方々が、山岳部再建に必死の努力をされ、1961年戦前からの夢であった、ヒマラヤ遠征隊を、ランタンリルン峰登頂に派遣する運びとなりました。

隊長は、昭和16年商大卒の森本嘉一氏。学徒兵として応召し、終戦後2年間、酷寒のシベリアでの重労働に耐え、ヒマラヤへの夢を抱き続けられた方です。

この第1次隊は、リルン氷河ルートを取り、順調に登攀を続けておりましたが、5月11日午前4時45分に、大きなブロック雪崩が第3キャンプ（標高5600m）を襲い、森本嘉一隊長・大嶋健司隊員・シェルパのギャルツエン・ノルブ氏を襲いました。

とくに、日本人お二人のご遺体は、氷河のクレバス（深く大きい裂け目）の奥深く埋まり、収容出来ぬまま今日に至っていることは、大自然が相手とは申しながら、痛恨癒し難い事となっております。

しかし、後輩らよくご遺志を繋ぎ、1978年10月24日 伴 明隊長ひきいる日本・ネパール合同隊が、初登攀を果たしました。

此度、仏式での50回忌にあたり、有縁の人々28名が慰霊のため、現地を訪問。5月11日 快晴の下、村はずれの小高い丘・・・そこは、ランタンリルン峰南稜の、裳裾棚引く最末端の岩稜が、麓の村の背に大岸壁を削ぎ落とす、その懷に抱かれた岩陰です・・・に設置されたモニュメントの前に、ご高齢の池永名誉顧問、副隊長として九死に一生を復された廣谷会長、事故当時未だ小学生であられた、遺児の森本広志氏はじめ、参列者全員が集い、澤田導師（曹洞宗和尚・・・山岳会会員）のお導きのもと、般若心経を唱え、大阪市立大学逍遙歌（寮歌）を合唱して、ご冥福を祈りました。

これに先立ち、5月9日正午 当時登山隊のベースキャンプ跡（リルン氷河モレーン4300m地点）に、ランタンリルンと真正面に対峙して建つケルンの墓碑へも、B隊・C隊の人たちが登り、慰霊祭をとり行いました。

私は'96年、親しいシェルパとポーターを伴い、単独でこの地に来ておりますが、今回は麓の村（3800m）から高度差わずか500mの、氷河モレーンぞいの登行3時間半は、文字通り地を這うように苦しい登りで、14年の歳月と心身の衰えを、骨身に

沁みて知らされた山行でしたが、「この道が俺のエベレストだ。」と、繰り返しつつ一歩一歩登りました。

茫々半世紀 少年の遺児も何時しか還暦を超え、同輩も多くは蹠踉を嘆くといえども、この山に召されし君が面影は、永遠に青壮の笑みを失はず。

生者は老い 死者は不老を以って、凡夫に無常を知らしめん哉・・・との想いは胸に溢れて、即興赴くまま、鎮魂の挽歌数首を詠み墓前に捧げました。

ご高覧いただければ幸甚です。

敬 具

ランタンリルン 挽 歌

仰ぎ見る 氷の谷の奥津城に

山友を残して半世紀経ぬ

半世紀 風雪に耐え佇める

墓標よ我ら今会いに来し

亡きひとの 面影いまでも若やぎて

五月の風は谷吹きわたる

一掬の 日本の酒を手向けつつ

山友らが歌う逍遙歌悲し

ランタンの 谷のしじまに逍遙歌

響きて届け君が奥津城

登り来て 胸底ふかく息づけば

ランタンリルン眼前に聳^たつ

見あぐれば 遥かに高き稜線の

彼方に青きヒマラヤの空

合 掌

ことは12月半ばから1月にかけて久々の大雪でした。で、頑張って山スキーに出かけました。伊吹山2回、白馬周辺3回、平湯界限2回、GWは今までもお薦めしていた剣岳一周パノラマルート of 再訪です。ただ内容の濃いところにはまったく行っておりませんので報告するほどの記録はないのです。しかしながら山岳会報に山スキーの記録がないのも寂しいとのことで、2年続きでつたない報告をさせていただきます。

厳冬期は、山スキーの好適地の日本海側は天候がいまいちで、冬型になっても比較的天候の安定する平湯界限はお薦めの場所です。ここでポピュラーな山は四ツ岳、猫岳と金山岩、輝山です。あと焼岳や十石山も近くにあります。今年で3回目ですけど、中ノ湯に泊まってこの辺りの山スキーを楽しむということをしております。ことは2/20-21に行きました。

ばくは現在車に乗っておりませんが、中ノ湯や平湯に行くには車がないと不便です。で、中ノ湯に行くときは車を持っている仲間に同行を強要して出かけます。今回はS総合病院の木村 Dr に2/20 朝松本駅に迎えに来てもらい、2/21 はO医療センターの小林 Dr の運転で帰阪しました。医者ばかりの山行です。

2/20 は中ノ湯から焼岳に登りましたが、天候がいまいちで2300m 辺りで断念して、下堀沢を滑って下山しました。ガイドでは下山ルートは下堀沢の両岸の台地上を滑ることになっていますが、どうもブッシュが多そうで、いつも下堀沢の中を滑ってしまいます。雪崩、落石要注意です。

2/21 は金山岩です。中ノ湯で朝食を食べてから出発します。過去2回の中ノ湯泊山スキーは2日目に四ツ岳に行きました。四ツ岳は時間が掛かりますので宿で朝食を摂る余裕がなく、いつもおにぎりを作ってもらいましたが、かなり損をしていることが解りました。つまり朝食はけっこう豪華だということです。平湯温泉スキー場まで行って、リフトの開始とともに乗車して一気に標高差500m を稼いでしまいます。あとは尾根の縦走で up-down のあるルートをスキーでじりじり登ります。この日はすばらしい天候で風もなく、冬なのに頂上でかなりのんびりできました。さて問題は下山ルートです。往路の尾根を戻ると滑降は楽しめません。北に向かって一気に滑り降りるのがよいとガイドには記してありますが、どこもかなりの急斜面です。たまたま先行パーティがおり、いかにも百戦錬磨でよく知っているという雰囲気漂っていたのでついていきましたが、途中で滝に阻まれて右の急斜面を登り始めています。往路は左の尾根なのでぼくらは左に登りました。この滝さえクリアすれば楽しい滑降が待ちかまえていたのかもしれませんが、ぼくらは往路を up-down の繰り返しでおもしろくないスキーをして帰ってきました。金山岩からの楽しい滑降ルートを探すというのが来年のテーマになったのです。また来年も中ノ湯に泊まって優雅な朝食を食べてから金山岩に向かいたいと思っています。(22.5.23 記)

ダイヤモンドトレール をのんびり歩く

(屯鶴峯 154m—二上山 474m—葛城山 959m—金剛 1125m—岩湧山 897m—槇尾山 600m)

時期：2010年3月13日・3月27日～28日

メンバー：上田 忠士、鷺田 ゆり子、苑樹 慶子

ランタン・リルン追悼トレッキングに参加させて頂く事になったが、トレーニングの必要性を感じ、屯鶴峯～槇尾山・全長45kmを歩いた。コーチ役は上田さん。二上山から紀見峠までを1日で踏破する大会があるらしいが、私たちは3日間で。こんなに歩いたのは何年ぶりであっただろうか。万歩計による歩数などは次のとおり。(ダイヤモンドトレール以外の歩数を含む)

第1日：43000歩 25km、第2日：32000歩 20km、第3日：33000歩 20km

3日間の合計 108000歩 65km

第1日(3/13) 晴れ 屯鶴峰—二上山—岩橋山—葛城山—水越峠

近鉄、上の太子駅下車、屯鶴峰まで車道を歩き小休止のあと、10:00 トレールを歩き始める。天気良く、人の姿もない。二上山まで緩やかな登りだ。竹の内峠を経て平石峠着 12:50。ここで昼食。葛城山に向ってひたすら鷺田さんの後を歩く。なかなかいいピッチである。14:15 岩橋山通過。葛城山頂 16:20。遅い時刻であり、この広い頂上広場に誰もいない。しばし静寂の中、暮色を味わう。水越峠到着 17:50。やや暗くなっており、タクシーで富田林へ。(上田 忠士)

第2日(3/27) 晴れ 水越峠—金剛山—高谷山—行者杉—紀見峠

今日は、晴れ女二人の力で、肌寒いけれどもお天気は最高。8:50 水越峠からの登りは、急な階段が続く。階段は自分の歩幅を狂わせられるので嫌だなあとthinkながら登っていると、大きな霜柱が。まるで白い大輪の花のように美しく、沈んでいた気持ちを明るくしてくれる。10:00 コル着。昨夜からの冷え込みで雪が降った様で、登山道には雪。思わぬ雪景色が足の疲れを忘れさせてくれる。10:50 金剛山頂への分岐到着。11:30 ちはや園で春の香りいっぱいの鷺田さん手作りお惣菜と、熱い、熱いコーヒーを頂き、花より団子を満喫。少し寒さに震えていた体が、これで生き返った！

13:30 千早峠を過ぎ、15:30 天見駅への分岐。西の行者を過ぎると、最後はマタマタ、急な階段が終わりの無いように続いていた。17:30 紀見峠駅着。雲ひとつ無い青空の下、雪と桜とつららに出会い、とっても気持ちのいい楽しい山行きであった。(苑樹 慶子)

第3日(3/28) 晴れ 紀伊見峠—岩湧山—滝畑ダム—槇尾山施福寺

8:00 昨日の疲れを癒してくれた国民宿舎・紀伊見荘を出発。紀見峠から三合目・根古峯・五ツ辻・東峰を経て 11:40 岩湧山に着く。山頂のススキが原では年に一度の山焼きが行われていて、山頂の通過は不可。南側の千石谷沿いの林道(普段は通行不可)を下るよう指示され、槇尾山からの最終バスに間にあうよう小走りで滝畑ダムへ。途中、昼食をとり 14:00 ダム着。ボテ峠を経て 15:45 槇尾山施福寺(西国霊場・第4番)に着く。ダイヤモンドトレールはここまで。硬い握手を交わす。参拝の後、門前の駐車場まで30分、最後の力を振り絞って歩く。5:00の最終シャトルバスには余裕で間にあった。久しぶりの長距離・長時間の山行となり、以前に痛めた足の裏・指先が少し痛かったが何とか歩き通す事ができた。コーチ役の上田さんが「ヒマラヤは大丈夫です」と言って下さった。(鷺田 ゆり子)

総会が開催されました！

2010年4月17日

於：大阪弥生会館

今年も35名の出席の下、総会が開催されました。川勝会長の挨拶に始まり、佐々木幹事長の総括報告があり、山田幹事の昨年度活動報告・今年度活動予定や上田幹事の会計報告、中嶋幹事の「ヒュッテ雪線」報告等がなされました。また役員改選も行われ、会長・幹事長・東京支部長の交代がありました（会計報告、本年度役員、「ヒュッテ雪線」関係については別紙参照下さい）。

今年の記念講演は、当会の和田城志氏に「思い出のカラコルム及びヒマラヤ」と題して話していただきました。当会では比較的なじみの薄いカラコルム、特にナンガ・パルバットを、多くのスライドとともに紹介してもらいました。

引き続き懇親会は、ランタン・リルン追悼50年墓参団の結団式も兼ねており、遺族からは大嶋信吾氏、縁の方々としては遭難当時救援に駆けつけていただき大変お世話になった大阪大学山岳会の住吉氏および西川氏に出席いただきました。

会長就任挨拶

廣谷 光一郎

先程の東京支部の昨年の状況でお話しましたように、この度、会長を引き受けることになりました。まずは川勝前会長に今日までのご苦勞に敬意を表したいと存じます。役員改選による東京でのスタッフも幹事長の山田氏はじめ揃っており、何とか運営することができると思いますので、いくつかの要点について、私の現在の考え方について述べさせていただきます。

まず、川勝前会長が承認された5月から始まるランタン・リルン追悼50周年墓参をつつがなく終わることを念頭に運営する必要があると思います。何故なら、30数名という大世帯でもあり、各チームの行動範囲も、A、B、C、C'など多岐に亘っていること、また、数名のお客様も参加されることになっておりますので、各チームの担当責任者を選出、十分に気を使って行動して頂きたいと存じます。次にランタンカルカでの法要に関しては、ランタンカルカとは言え、3000mを越える高度ですので、参加してくださるDr.の方々に於かれましてはA隊メンバーを中心にケアをお願いしておきます。

次に来年2011年は当山岳会90周年になります。この機会に他の大学山岳会に倣うのではなく、独自のイベントをする必要があらうかと存じます。

何故かといえば、数次にわたるランタン・リルンへのアプローチに対してリルンは大阪市大に是非行かせたいという心情より、強力なバックアップをして下さったのはJACの方々であったこと、一次隊の後始末についても言葉では言えない程の各大学の協力を頂きたこと、その他許可をとるのが難しかったカンジロバ隊や四光峰隊等についても絶大な協力を頂いたとも付言しておきます。

以上のような事に対して90周年のイベントは、大阪市立大学山岳会90周年委員会を発足させ、十分に検討し、意義ある山岳会創立90周年の祝賀を持ちたいと思っておりますので、何卒よろしくご協力くださいますようお願いし、会長あいさつに変えさせていただきます。

幹事長就任挨拶

山田 裕敏

昭和42年に経済学部を卒業しました山田です。私は1 昨年末に亡くなった佐藤幹事長の同期でして、彼が数年間務め2 年先輩の佐々木さんがそれ以前の数年間と直前のショート・リリーフを果たされた後に今回私へのバトン・タッチとなりましたので、年代的には10年ほども停滞したままとなっております。余り長居せずに次の方に引き継いで戴こうと思っています。

では、この間に何をやるのか、といった抱負でございますが、1961年春のランタン・リルン遠征は当会創立40周年を期しての記念行事であったことが報告書に明記されております。2011年はこれから数えて50年ですので来年は丁度創立90周年に該当する事となります。大学山岳部活動の低迷化に引き比べ、中高齢の方々の活躍される登山ブームが顕著な社会現象となっておりますが、当会に於きましても駒ヶ根の山荘を拠点とした種々の活動、冬季のスキー学校の賑わい、ヒマラヤ・トレッキングの定例化など次々に登場する60～65歳の年金世代の活躍が賑やかでして、仮に運動年齢が80歳までとしても、この先思いがけない充実期が続いてゆくという予感を覚えております。

そうした事を背景に90周年行事としましては、内外の山での記念登山、大阪で祝賀会の開催、そして出来れば90年記念誌の発行などを考えています。記念誌につきましては全く私案の段階ではありますが今はもう皆様亡くなられておりますが、戦前世代のご活躍の模様に重点を置いた編集が出来ないかと思っております。その時代の登山界は日本勢も欧米の動きを斜めに見ながら、各自・各団体・各学校山岳部として踵を接して未知なる所を求め、より高くを目指したものですし、將に坂の上の雲を見て登った懐かしい良き時代だ

ったと考えるからです。構想倒れにならぬよう努力したいと思います、いずれにしましてもこれ等90周年記念行事の実施につきましては、早急に3つの委員会を設けそこにて企画・運営に当たって頂く予定であります。

本件以外にも懸案事項は種々ございます。出来るだけ多くの会員の方々が参加される賑やかな会の運営を志したいと考えています。皆様のご協力を宜しくお願いいたします。

2009 年度活動報告

実施月	行 き 先 等	参 加 者
4月20日/5月12日	ゴーキョ・リからカラバタール	佐々木夫妻
	アイランド・ピーク	伴
5月連休	東沢源流山スキー	田中スキーグループ
	硫黄尾根	片岡
	赤岩尾根から鹿島・爺	兵頭・山田 現役松本
6月5日/7日	飯豊 石転び沢	伴・兵頭・山田
7月17日/20日	駒ヶ根山荘 草刈、駒前岳から千畳敷登山	雪線運営委員会協賛
	囲碁・ゴルフ会	
9月中旬	南ア 聖岳	福山 百名山会
10月2日/11月1日	ロールワリン・トレック	伴、佐々木
	ガウリサンカール山麓、ヤルン・リ、パルチャモ登頂	
10月31日/11月3日	駒ヶ根ゴルフ・囲碁会	馬野・廣谷他
	(兼山荘清掃)	
12月30日/31日	年末 富士山行	伴、兵頭

小笹スキー・スクール

12・1・3月	於 夕張	大堀教頭他恒例メンバー
1・2・3月	於 樽池	兵頭副校長他恒例メンバー

2010 年度活動予定

実施月	行 き 先 等	参 加 者
4月1日/4日	ネパール・トレック雪上訓練 於 空木岳	伴、佐々木他
18日	ランタン・トレック足慣らし 於 比良山	伴、島川、宗實他
4月27日/5月27日	ランタン碑50回参拝行	池永名誉顧問他30名
6月	飯豊/朝日方面	東京支部
7月17日/20日	駒ヶ根山荘 草刈 囲碁・ゴルフ	雪線運営委員会協賛
8月	夏山合宿	現役山行に follow
9月/10月	近郊登山 関西/関東夫々	都度案内
10月31日/11月3日	駒ヶ根ゴルフ・囲碁会 (兼山荘清掃)	恒例メンバー
12月	年末 富士山詣で	伴、兵頭他

小笹スキー・スクール

12・3月	於 夕張	恒例メンバー
1・2・3月	於 樽池	同上

平成22年度総会案内の通信欄より

○脳梗塞で好きな山へも行けません。残念! (S30 年卒、山本勝)

○脳梗塞で入院リハビリ中です。いろいろお世話ありがとうございます。

(S32 年卒、林日出雄)

○リルン追悼 50 年。当会ヒマラヤ遠征の原点。前年の 1960 年 11 月富士山で遠征装備等のテストに 1 年部員として一人、軍手で参加。夜中に慶応大ヒマリチュリ隊から借りたカマボコ型テントが吹雪で破られ、森本隊長の指導を受けたことなど思い出され

ます。そして二次リルン、カンジロバへと展開。リルン墓参団に参加の予定でしたが医師団と相談の結果、参加断念しました。30 名を越える大墓参団ですが、無事のご帰国をお祈りいたします。合掌。(S30 年卒、常慶和久)

○ネパールにも行きたいのですが、勤務が現役ではまなりません。現在は市の委託の植物調査に忙しく、愛知県内の低山を歩いています。本年の皆様のご無事なご旅行をお祈りいたします。(S51 年卒、渡部教行)

○残念ながら今年も欠席します。盛会を祈念いたします。(S41 年卒、丸子隆志)

○今シーズンも柵池高原で皆様とスキーを一緒にいたしました。(賛助会員、柴原勝)

○川勝氏に京都支部会で会い、今度は沢山のメンバーが墓参団に参加されるとのこと。ご盛会をお祈りします。大市大経済の非常勤講師の発令を受け、その準備中で欠席します。(S30 年卒、高木健次)

○土曜日は仕事の都合で出かけられません。皆さんで楽しくやって下さい。ヒュッテ雪線でお会いしましょう。(S36 年卒、久保田淳三)

○俳句(吟行)、寺まいり、ゴルフ。(S33 年卒、東野美智代)

○永い間、欠席で申しわけありません。昨年、喜寿を迎えたと同じく、一寸足が半年間不自由になりましたが現在は山行もして元気になっています。土曜日は軽い仕事が入り、なかなか都合がつかず残念です。皆様方のご活躍、メールで楽しく拝見させていただいてます。(賛助会員、稲垣喜久雄)

○いつもお世話になっております。新年度で何かと時間がなく、今年も申しわけございませんが、失礼させていただきます。(S56 年卒、岡秀郎)

○出席するつもりでおりましたが、急な社用で出席できず残念です。リルン墓参団これも行きたいと思ってましたが、決算発表もあり行けません。報告を楽しみに待っております。皆様によろしくお伝えください。(S39 年卒、岡野幸義)

○トレッキング楽しみにしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(賛助会員、鷺田ゆり子)

○華々しい市大山岳会のヒマラヤ活動にあこがれて、市大山岳部に入り 45 年過ぎました。リルンの遭難は 50 年前だったのですね。(S41 年卒、藤村達夫)

○今季はガマンして、来季が楽しみです。スキーってホント楽しい遊びですネ。

(S36 年卒、小笹孝)

○今秋(9/15~11/7)の予定で岡山県山岳連盟設立 60 周年の記念登山にてランタンリルン(南綾ルート)へ登山する予定です。登山隊名「岡山ランタンリルン登山隊 2010」ご指導よろしくお願い申し上げます。(S54 年卒、武部秀夫)

○相変わらずアメリカをベースに日本、アジアを走り回っており、ご無沙汰申訳なし。

(S28 年卒、内藤一毅)

○リルンの参加ができなく残念ですが、皆様(参加される)の無事故を祈っております。

(S46 年卒、澤井弘忠)

○阿蘇、くじゅう、祖母、春の野焼き、5 月のミヤマキリシマ、秋のやさしい紅葉に出会えます。のんびり気軽に山登りの基地としてユースホステルへどうぞ。

(S55 年卒、西沢裕子)

○病氣療養中のため欠席します。五月のランタン行きを楽しみにしております。

(S33 年卒、門田嘉弘)

○お世話になっております。お元気でしょうか？僕はヒザを痛めて全く山に登れていません。その代わり、毎週、嫁とクライミングジムに通ってますが、やっぱり重い荷物を背負って冬山とか、また登りたいものです……。 (H20 年卒、藤井陽介)

○定年以來、体調不良が続いてまいっています。ぼちぼち近くの低山を歩いてみようかと考えているこのごろです。まったく元気な先輩方がうらやましいかぎりです。

(S46 年卒、安部大典)

○最近は出不精になってどこにも出かけていませんが元気に過ごしています。

(S27 年卒、谷口清士)

池田正男先輩に送る

池永 薫爾

第2次大戦において我が山岳部は多くの先輩を失った。

戦前の黄金時代を築いた片山、入江、戸塚さんらが戦火に散り、帰らぬ人となられる。

又、森本先輩はシベリアに抑留され、帰国されたのは数年後であった。

戦後、大阪商科大学山岳部は復活したが、新入生である私等数名が居るだけで、先輩は誰もおられなかった。

学部3年には鈴木武夫さんが居られたが、食糧難の時代、鈴木さん一家は岐阜県恵那に疎開されており、そこから時々大学に登校される状態で、とても山岳部の後輩を指導される状態ではなかった。

そんな中、既に卒業されていた池田さんが我々を御指導いただいた。

休日にはロックガーデンに連れて頂き、岩登りのABCを教えて頂いた。

泉さんと初めてお会いしたのも、本町隆泉寺であり、池田さんにアレンジして頂いた。

その後、隆泉寺で上田安子服飾学院がスタートしたが、諸道具の運搬などをお手伝いし、お小遣いを頂き、それで山岳部の装備を買わせて頂いた。

又、山岳部の会合に、池田さんが経営される肥後橋のレストランを使わせて頂き、御馳走を頂戴した。

上田安子服飾学院は、池田さんが理事長を勤められ、宝塚造形芸術大学へと発展されていった。

かたわら池田さんは、腎臓バンクの活動にも支援の手をさしのべられた。

我々のヒマラヤ委員会がスタートしたのも、池田さんの発案であった。

ティルマンのネパールヒマラヤを皆で輪読し、私の記憶に間違いがなければ、その中に「ランタンへ」「再びランタンへ」の文章が、我々をランタンリルンに向わせたきっかけになったのではないかと思う。

大学卒業後、余りお会いする機会は無く今日に至ったが、この度池田さんの訃報に接し、大変残念である。

今年は森本先輩、大嶋君の遭難50回忌に当り、諸君がランタン訪問を企画されており、私も参加を予定させて頂いている。

戦前の活躍された諸先輩が次々亡くなり、寂しい限りである。

御世話になった池田先輩の御冥福を御祈り、葬送の言葉と致します。

合 掌



<編集後記>

- ・池田正男氏が昨年11月3日88歳にて永眠され、12月17日に「お別れの会」が催されました。「お別れの会」パンフレットによれば、『私の家は、住吉大社近くにある5百年以上も続く旧家でした。もともと地主で、造り酒屋をしていて祖父の代に酒のほかに加工味噌「住之江味噌」を造るようになった』云々とあります（「教育事業の原点」）。大学卒業直後2年間の住友鉱業勤務を経たのち「上田安子服飾学院」設立以降の略歴については、池永名誉顧問の追悼文にもうかがい知ることができます。追悼文により、大市大山岳会への多大な寄与を知ることができました。改めてご冥福をお祈りいたします。
- ・今回の50回忌法要はめったにない機会のため、私も「ランタン・リルン追悼」イベントに参加したかったのですが、あいにく見送ることになりました。せめても、と「会報50号」に寄稿いただいた各位の文章と「ヒマラヤ・ランタン花紀行」（高橋佳晴著。誠文堂新光社。1996年5月刊）を横に置いて、机上の墓碑参拝をいたしました。（奥田 記）